疑問の多い工樂松右衛門旧宅の一般公開

～松右衛門に対する誤った理解を正し、見学者に正しい歴史評価を示す展示を！～

◎　工樂松右衛門旧宅保存の意義

工樂松右衛門の旧宅を高砂市に寄贈する際、建物内に保存されていた文書のうち約 3,800 点の古文書の調査、解読を日本福祉大学の曲田浩和、高部淑子両教授らに依頼していましたが、その結果が「工楽家文書調査報告書」として 2019 年 6 月 5 日、高砂市教育員会から発行されました。その調査結果によると、工樂松右衛門旧宅は初代の工樂松右衛門が建築した家ではなく、明治期に四代目が買得した家であることが分かりました。初代松右衛門は、晩年に兵庫津から高砂に戻ってきて亡くなるまで生家のあった東宮町に居住していました。従って初代松右衛門から三代目までは、東宮町が生活の中心であったと思われます。現在公開されている工樂松右衛門旧宅は、四世以降の松右衛門が暮らした家で、初代松右衛門の北前船船主の家ではないことが明らかになりました。

工樂松右衛門は高砂の東宮町から兵庫津に出て船乗りとして活躍し、そこで次々と重要な業績を残しました。それは、高砂神社にある初代の工樂松右衛門銅像建立祝賀会に参列した人達の参列者名簿を見るとよく分かります。高砂をはじめ、加古郡町村の役人、議員以外に北風荘右衛門関係者など、兵庫津の人々の名前が多く出てきます。初代松右衛門が生まれ、晩年に帰ってきて亡くなるまで過ごした東宮町の家はもうありません。

©2019 Matsuemon foundation. All rights reserved.

旧、中の間土間天井

◎展示方法、コンセプトに関する疑問

改修された建物の中に一歩踏み入れても、工樂松右衛門の業績が系統立てて正しく紹介され、それに関する文書や遺物が展示されているとは言えないようです。一番の問題点は、松右衛門帆の展示、紹介です。工樂家旧宅には、天明年間に工樂松右衛門が創製した手織帆布の実物が大事に保管されているのは周知の事実であるのに、それを見聞することなく、密かに真贋定かでない通称松右衛門帆を研究用として大学に寄贈した切れ端を参考に、それを再現して製作したという、一鞄業者の帆布生地を、正直な説明を加えず真実の「松右衛門帆」として工樂松右衛門旧宅の重要展示物としていることです。それを知らない見学者の期待に大きく背いています。工樂松右衛門の旧宅の展示物をどこが責任を持って運営しているのか定かではありませんが、大きな疑問が残り、猛省を促します。工樂松右衛門旧宅に展示されている松右衛門帆は、苦労して工樂松右衛門が開発した実物ではありません。

工樂松右衛門創製の帆布　工樂家所蔵

見学者に真実の歴史を伝えようとしていないことに不安が残ると同時に、工樂松右衛門旧宅を一事業者のビジネスのために利用させている、ということでしょうか。北前船の船主集落の一つとして日本遺産に認定されましたが、あの薄い松右衛門帆で荒れる日本海を航海して、蝦夷・北海道までの航海を安全に乗り切れ、あの江戸後期の北前船勃興の時代において独創・発明した郷土の偉人の松右衛門帆だとは言えません。

◎工楽家保存のもう一つの意義

現在の改修された建物は今風に修復・改修されてはいますが、例えば旧宅の案内書などに明治期から昭和の時代にかけて、時代の生活スタイルに合わせて各部屋の使用状況がどのように変わってきたのかという説明があれば、もっと幅広い見学者の興味、関心を引くのではないかと思われます。この旧宅の寄贈後そうした質問や話し合い、説明の機会が設計者と全くなかったようなので仕方ないでしょうが、非常に残念です。工楽松右衛門三世、四世、五世が暮らしていた頃の住まいと

旧　店の間（板敷事務所）

©2019 Matsuemon foundation. All rights reserved.

改修直前の住まいの状況は、明治以降改修、改築が繰り返されてきたため同じではないようです。玄関に入って左側の部分、土間、庭倉、おくどさん、井戸のところまでは変えたという話はきいていません。古い商家の庭倉は、商材を保管する重要な役割を果たしていましたが、それを無くして職員用の近代的なトイレに変えてしまうなどの設計変更はどうかと思います。おくどさんは大正期に修繕して今の煉瓦造りになったと思われます。玄関から入って右側部分は、明治の初期は畳敷で帳場の役目を果たしていましたが、明治末期に床は板敷になり、大きなカウンターを設けて現代風の事務所に改造されたようです。2階の洋間、ベランダ部分は大きく変更されました。しかしそれは、その時の当主の時代文化適応力に従ったのかも知れません。

◎昭和12年以降は文化研究会の活動拠点

昭和の初めには居住部分の1、2階ともに改造が加えられてほぼ現在の間取りに近い構造になりましたが、最も大きな違いは、2階の多くの部屋が板敷きの洋間に変わったことです。

昭和の時代に入ってからの工樂松右衛門旧宅は、時の当主、初代松右衛門から数えて六代目の長三郎によって大きくその使用方法が変わり、改装されました。長三郎は自ら文学的、芸術的趣味が強く、洋間の各部屋の壁には書棚を作って文学書、芸術書がたくさん並びました。

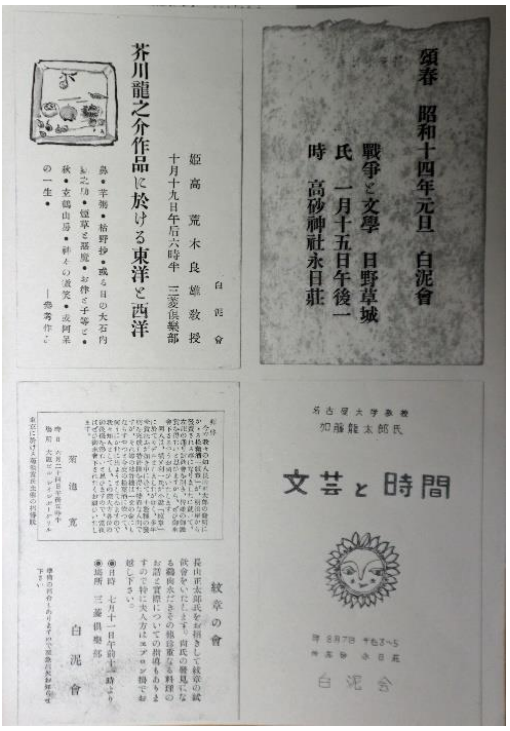
応接間の置物

棟方作品と長三郎妻、いつ

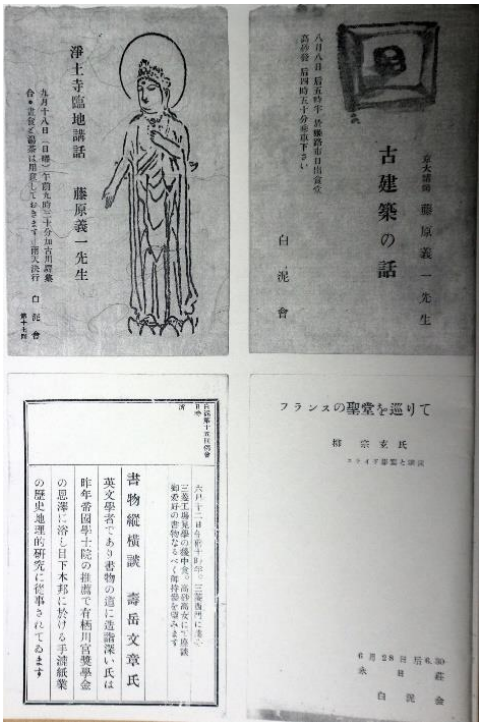
長三郎

自らは短歌を詠んで楽しんでいました。そして白樺派の運動にも関心をよせていた長三郎は、その後柳宗悦や河井寛次郎、浜田庄司らが始めた民芸運動に共鳴し、その講演などの場で棟方志功や河井寛次郎などとの交流がはじまりました。この高砂で芸術の話ができるメンバーを呼んで、そこに棟方志功をはじめとする様々な分野の芸術家を招いて文化運動をはじめることになります。そしてその集まりが、昭和12年に文化研究会「白泥会」の発足となってこの地方都市における芸術・文化運動を牽引することになりました。

©2019 Matsuemon foundation. All rights reserved.



昭和 14 年の白泥会開催案内書



第 15 回ほかの白泥会案内書

当時は、まだ無名で目を向ける人がいなかった棟方志功の作品の価値を高く評価していた長三郎は、棟方志功を呼んで、高砂、加古川、三木で棟方作品の展示即売会を設けて、棟方志功の生活資金集めに協力しました。その縁で、棟方志功が倉敷の大原孫三郎宅を尋ねる度ごとに途中下車して頻繁に高砂に立ち寄るようになり、高砂の工樂家で棟方志功の多くの作品が生まれました。長男禎章が一階仏間の横にある 8 畳の間に 2 階の応接間から蓄音機を持ち込んで明かりを消して真っ暗にし、ベートーヴェンの第 9 交響曲を家族と一緒によく聞いていました。

志功と第 9 を聞いてた
蓄音機

彼の板画作品「ベートーヴェンの歌」はそうして生まれました。棟方志功を紹介している VTR で、板画制作中に「第 9」の 4 楽章、喜びの歌を口ずさみながら彫っているのを見たことのある人がいると思います。あれは、高砂でのこうしたことが積み重なって習慣になったのでしょう。このような思いから、長男、禎章の詠んだ歌を、棟方志功は板画にしています。

この 8 畳の間の襖、床の間は、志功の描いた絵で楽しみが満ちていましたが、いまはその面影を忍ぶことはできません。

©2019 Matsuemon foundation. All rights reserved.

工樂禎章の歌を棟方志功が板画に

座敷で鯉を描く棟方志功

さらに長三郎はその棟方志功を喜ばすため、その 8 畳の間の奥の部屋を、そこに炉を設けて本格的な茶室に改装してお茶好きの棟方志功を喜ばせようとしました。長三郎はその部屋の内装にこり、襖の紙の素材、デザイン、引き手など、全て民芸調の木製、焼き物の素材を探してきて揃えました。こうしたストーリーと共にその部屋を正しく復元して紹介すれば、工樂松右衛門旧宅の違った意味、目的での見学者を増やすことになるのではと思えて非常に残念です。その部屋の所以や内装を設計者は何も知らないので公開、見学の対象にはなっていません。有効活用されていた頃の工楽家をよくご存じの方から、現在の復元状況を見て非常に残念だ、という感想がしばしば届きます。

以上のように昭和の時代における工楽松右衛門旧宅の使用方法を一部紹介しましたが、この旧宅の展示に、長三郎の審美観に基づく収集品や民芸関係のものをその意味をよく分からず単なる断片のみを「見世物」として展示しているのは大きな間違いですし、すべきではありません。この建物には、もっと松右衛門の業績を丁寧に紹介することと共に、何故そうした人物、その人の業績が高砂という漁村に近い一地方から輩出し、注目すべきなのかというところに焦点を置いた展示が重要です。その点を真剣に考えてもらいたいものです。まずもって、この工樂松右衛門旧宅の公開展示の目的、意図を明確にしてほしいと、強く望みます。

©2019 Matsuemon foundation. All rights reserved.